

須磨

長唄「汐汲」は一八一一年に、江戸市村座で七変化舞踊の一つとして坂東三津五郎（三世）が初演したものです。流罪を赦された在原行平が都へ帰った後、取り残された海女の姉妹のうち、松風が行平の形見の烏帽子狩衣を着て、二人の逢瀬を偲ぶという内容のおどりですが、今回は松風・村雨の姉妹が行平を偲ぶという設定にして新しく鯉矢先生に振り付けていただきました。前者が、内容よりもむしろ歌舞伎舞踊としての華やかさを重視しているのに比べて、今回はストーリーを重視しました。

ゆかしき伝も白波の寄する渚に世を送る　差くる汐を汲もうよ　月
は一つ影は二つ三つ　見られつも雲の上　ここは鳴尾の松蔭に　月
を荷うて　見渡せばおもしろや馴れても須磨の夕まぐれ漁る船のや
つしつし　波をけたてて友呼び交わす　はんま千鳥のちりやちりち
りちりちりぱっと塩屋の煙さえ　立つ名厭わで三年をここに　須磨
の浦曲の松の行平立ち帰り来ば　我も木陰にいざ立寄りて　磯馴松
のなつかしや　形見こそ今は仇なれ見初めて初めて　逢うたそのと
きやつい転び寝の帯も解かいでそれなりに　二人が裾へ狩衣を掛け
てぞ頼む睦言に　それから深う言交島の　水も漏らさぬ仲々に　濡
れに寄る身は傘さしてござんせ　人目せき笠いつ青傘と　氣を紅葉
傘白張の殿御に操立傘も相合傘の末かけて　誓文真実端折傘と言わ
れたら思いも開くはんな傘　暇申して帰る波の音の　須磨の浦かけ
て村雨と聞きしも今朝見れば松風ばかりや　帰るらん松風の松風の
噂は世々に残るらん